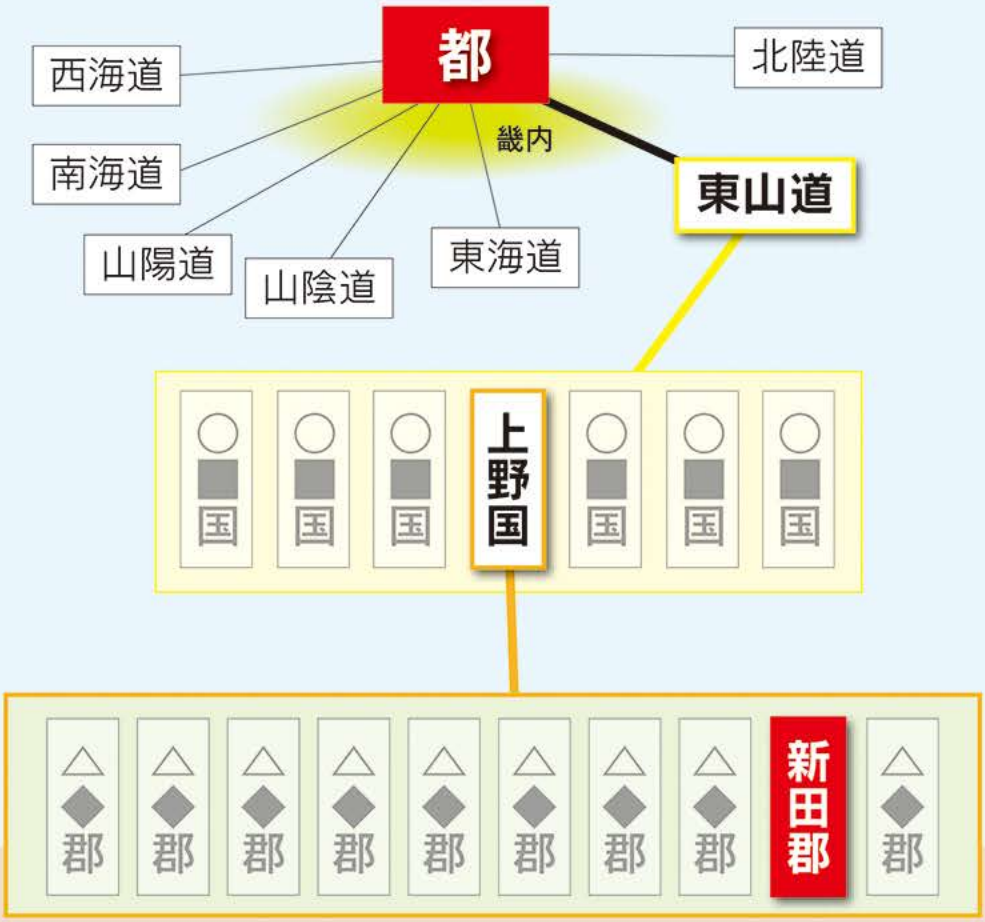
新田郡家（郡の役所）と考えられていた天良七堂遺跡の調査は、宅地の分譲計画をきっかけとして始められました。しかし、調査が進むにつれて大きな柱穴が直線上に並び出し、長大な建物跡が現れました。そこでこれらの重要性を明らかにするために地権者の方々にご協力をいただき、全面におよぶ確認調査を実施することができました。その結果、長さ約50ｍもの長大な建物が東・西・南・北に配置され、東西の建物間は約90ｍの規模で建てられていることがわかりました。これが新田郡庁出現の第一歩です。

古代の役所とは

大化の改新後、日本は中央集権国家の成立に向かって本格的に動き出しました。国内のすべての地域に対して支配を及ぼすために様々な役所を配置しました。中国の行政区分にならい全国を五畿七道に分けて、各地に「国」を造り、その下に郡(評)を置いて中央集権国家の基礎を造り上げました(下図参照)。

東山道の区域に区分された上野国(こうずけのくに)は現在の「群馬県」にあたり、「新田郡は現在の太田市の西部を中心とした範囲でした。当時「郡」を治めていたのは「郡家（ぐうけ）」という役所で(今の市役所に相当)、確認された「郡庁」(ぐんちょう)はその役所の中で政務を行なう重要な機関でした。701年に制定された『大宝律令』によってこのような国家がほぼ完成しました。「新田郡庁」はこのような過程の中で造られてきたもので、奈良～平安時代にかけて使われていたと考えられています。